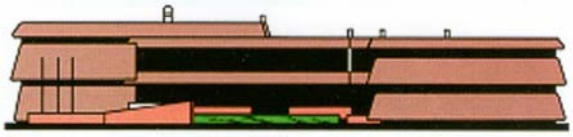
苫小牧市 博物館だより

2010.3
No.59



冬ごもりをするヒグマの様子（剥製）
ヒグマ成獣メス、ヒグマ生後１日目　のぼりべつクマ牧場ヒグマ博物館蔵

平成 21 年度企画展

春を待つ生き物たち

期間：平成 22 年 2 月 6 日（土）～3 月 20 日（土）　会場：特別展示室

厳しい冬を生き抜くために、さまざまな知恵と身体のしくみを備えた生き物たち。雪が降り、気温が低下して、食物が少なくなっても、環境の変化に上手に適応している生き物たちを写真や剥製、標本などにより紹介します。

縄文美の極み
～亀ヶ岡文化～
平成21年7月11日(土)～8月23日(日)

縄文時代の最後を飾る亀ヶ岡文化は、東北北部を中心に発達し、北海道を含め東日本の広い範囲に影響を及ぼしています。亀ヶ岡文化を代表する遮光器土偶をはじめ、精巧で華麗な土器は、その造形や施された文様が秀逸なため、美術工芸品としても高い評価を得ています。1万2千年以上も昔、土器を作り始めた縄文人が1万年という長い年月を経て辿り着いた「極み」の姿は、日本原始美術のなかでも光彩を放っています。

今回の特別展では、東北北部の遺跡から出土した土偶や土器、苫小牧市内や北海道内の出土品を含め110点あまりを展示し、亀ヶ岡文化の美を紹介しました。

赤と黒の彩り

亀ヶ岡文化の土器には、漆やベンガラで彩色されたものが見られます。また、黒は黒漆のほかに、表面が黒く光沢を持つものなども多く見られます。赤は墓の底にベンガラを撒くなど、縄文人にとっても特別な色だったと考えられます。これら彩色された土器はマツリなどの祭祀に使われる儀式用の器だった可能性があります。

黒漆塗り注口土器（苫小牧市博物館蔵）

赤漆塗り壺
（八戸市教育委員会蔵）

赤塗り鉢形土器
（一戸町御所野縄文博物館蔵）

香炉形土器
（八戸市教育委員会蔵）

環状注口土器
（青森県立郷土館蔵）

異形土器

胴の部分が環状に作られた注口土器は、どのようにして作られたのか分かっていません。また、形が香炉に似ている香炉形土器と呼ばれるものも、どのような使われ方をしたのか明きらかではありません。こういった特異な形の土器は、煮炊きや貯蔵といった土器本来の用途とは異なる特別な使われ方をしたと考えられます。

土偶と土製品

亀ヶ岡文化を代表する遮光器土偶。顔一杯にデフォルメされた目が特徴です。また、動物の形を模した土製品などは、細かい部分まで表現され、造形力と観察力の素晴らしさを教えてくれます。狩りの成功を祈るマツリや儀式に使われたといわれています。

遮光器土偶頭部
（一戸町御所野縄文博物館蔵）

クマ形土製品
（青森県立郷土館蔵）

Music in Museum by 出光
「大地礼賛ー実りへの感謝」

特別展「縄文美の極み」と連携して、音楽コンサート「大地礼賛ー実りへの感謝」が８月２２日（土）に市民会館で開催されました。このコンサートは出光興産株式会社が主催し、市民1,200名が無料で招待されました。

男声合唱団ベルカント、ホルン奏者ジョナサン・ハミル、ヴァイオリン奏者太田雅音、トランペット奏者アントニオ・マーティらにより「ラジオ体操のうた」「村祭り」「夜空のトランペット」など全１４曲が演奏されました。

会場を埋め尽くした市民は、素晴らしい音楽に耳を傾け、くつろぎのひとときを過ごしていました。

平成21年度企画展
アンモナイト～その魅力とふしぎ～

平成21年4月25日(土) ～ 6月7日(日)

アンモナイトの魅力とふしぎを、180点以上の資料で紹介しました。期間中の入館者は2,845名で、中学生以下の子供も多く訪れ、たくさんのアンモナイトを不思議そう見ていたのが印象的でした。

特に異常巻きと呼ばれるアンモナイトには「こんな形で海を泳いでいたの？」「どうやって動くのだろう」という質問が相次ぎ、まだ解明されていない謎が多い生き物に興味を深めていました。

（化石クリーニング体験）

期間中、子供たちに化石のことをより知ってもらうために、北海道化石会の協力で化石クリーニング体験教室を行いました。目の前に置かれた化石を含む石に、初めは恐る恐る触っていた子供たちも、化石会会員の指導を受けながら、ハンマーとたがねを使い化石の周りの石を取り除いていました。飛び跳ねる石のかけらから目を守るためにゴーグルをかけ、普段は使わない道具にもすぐに慣れて、子供たちはとても楽しそうでした。石が硬いところは同伴した保護者に手伝ってもらいながら、一生懸命クリーニングをしていました。最後にお土産として4500万年前の貝化石を受け取ると、うれしそうに持ち帰りました。

（やさしい展示解説会）

アンモナイト展が中盤の頃には、謎が多いアンモナイトに興味を深めた子供たちが何度も博物館に来る姿が見られました。そこで、子供たちに展示だけでは気づきにくいアンモナイトの不思議をわかりやすく説明するために、子供のための展示解説会を行いました。「アンモナイトの心臓はどこ？」「色が違うのに同じ名前なのはなぜ？」など、たくさんの質問があり、予定があっという間に過ぎてしまいました。子供たちはアンモナイト化石から、北海道の大地や生物の歴史を感じとったようで、解説会の後も展示をじっくり見てまわっていました。

樽前山タイムトラベル

平成21年7月18日(土)

今年は樽前山溶岩ドーム生成100周年という記念の年にも当たり、趣向を凝らした行事となりました。講師として北海道大学名誉教授の宇井忠英先生が同行し、最初に博物館で宇井先生による講演があり、その後、荒川副館長の解説で、樽前山の成り立ちや噴火の様子などを学習しました。うなずいたりメモを取ったりする子供もおり、これから行く施設の説明をすると「楽しみ～」と、期待を膨らませていました。子供たちからは「火山灰は何日で降ってくるのか？」「恵庭岳や風不死岳は噴火しないのか？」などの質問があり、質問した記念に樽前山の写真カードをもらい喜んでいました。たくさん質問をすると、その分カードがもらえるとあって、子供たちからは真剣に質問を考える様子がうかがえました。

博物館を出発し、錦多峰川2号遊砂地、ポロト湖畔、樽前山火山対策防災拠点施設などを回り、地層や施設を見学しました。宇井先生の解説で、実際の火砕流堆積物を見た参加者は「身近な樽前山のことをもっと知りたくなった」と話していました。中には樽前山の噴火の仕組みや成り立ちに興味を持った子供もおり、後日「夏休みの自由研究にした」とまとめたノートを見せにきてくれました。共催した環境防災総合政策研究機構のスタッフは、「これからも子供たちに身近な火山である樽前山や防災について知ってもらうために、工夫しながら行事を続けていきたい」と話していました。

フィールドミュージアム ～渡り鳥のひみつ～

平成21年10月31日(土)

この日は特に冷え込みましたが、予定どおり渡り鳥の観察会を行いました。博物館の展示室でウトナイ湖の成り立ちや周辺で見られる動植物について事前に学習した後、バスでウトナイ湖野生鳥獣保護センターに向かいました。双眼鏡を使うのは初めてという参加者もいたので、最初は湖畔で実際に鳥を見ながら使い方を練習しました。使い方になれてくると「あの鳥なに？」「仕草がかわいいね」など、早速観察を楽しんでいました。

センターでは、展示とビデオでウトナイ湖の歴史や周辺の環境について解説し、ウトナイ湖の変化に伴って動植物がどのように適応してきたかを学び、動植物を観察することでウトナイ湖の環境が推測できることを伝えました。昼食の後は観察路を散策しました。事前学習した内容を確認しながら歩き、湖の中でマガンが立っている所は浅い場所であるなど、観察したことから目に見えない部分を参加者全員で推測してみました。また目で見るだけではなく、音を聞いたり匂いを嗅いだり様々な観察方法も紹介し、実際にやってみながら観察すると、「こんな楽しみ方があったのね」「ちゃんと見ればたくさんの情報が読み取れることが分かった」など、それぞれ身近な自然を感じた様子でした。

芸術探訪 ～ジョルジュ・ルオー展～

平成21年11月21日(土)

札幌の道立近代美術館で開催された「ジョルジュ・ルオー展」と「これくしょん・ぎゃらりぃ」を見学しました。参加者は、午前中に美術館の学芸員より30分間にわたって、ルオーの初期から晩年までの作品の描き方やマチエールの違いについての解説を受けた後、展示室で代表作である「受難」や「ミセレーレ」など172点に及ぶ作品を、じっくりと鑑賞しました。

午後からは「これくしょん・ぎゃらりぃ」で、ボランティアガイドから解説を受けながら、シャガールとパスキン、ガラスの作品、浮世絵美人画の世界を鑑賞してきました。特にガラスの作品の展示では、キャストという技法で作られたガラス芸術の素晴らしさに参加者は驚いていました。「専門の学芸員による説明で、鑑賞するポイントが分かりやすかった」「ルオー展やこれくしょん・ぎゃらりぃで解説を聞き、いつもと違った絵の見方ができた」「ルオーの奥深さに感動した」などの感想が参加者から寄せられ、芸術の秋を十分に堪能したようでした。

出前講座

今年度は「苫小牧の動物」を新たに加え「苫小牧の歴史」「懐かしの音楽会」など6つの講座を設け、実物資料を活用した講座を行いました。

（苫小牧の植物・苫小牧の動物）

6月に錦岡小学校3年生の総合学習で、「苫小牧の植物」と「苫小牧の動物」を同時に行いました。3クラス合わせて89名の児童が、動物を調べるグループ53名と、植物を調べるグループ36名に分かれての授業を担当しました。

植物の教室ではスライドを使って植物調査の様子や標本の作り方を紹介し、実物の標本を見たり触ったりしながら学びました。「苫小牧にこんなにたくさんの植物があるなんて知らなかった」「調べることは大変なことなんだと思った」など、初めて触れる標本に驚いていました。

動物の教室では、鳥の剥製を使って鳥が何を食べているのか、観察して考えるゲームを行いました。嘴の形から食べ物を予測することは楽しかったようで、数種類の剥製を見比べながら考えていました。授業では図鑑に書いてあることが苫小牧でも同じなのか、自分の目で確かめることの大切さを伝えました。3年生にはやや難しい内容だったかもしれませんが、熱心に聴いてくれ「自分たちでもっと調べたい」「博物館にも行きたい」と話していました。

どちらの教室でも、学習の参考となるように、担当の教諭と打ち合わせを重ねて内容を考えました。博物館では、今後も学校と協力して児童が身近な自然に興味をもつきっかけとなるような講座を行っていきたいと考えています。

昔の暮らし探検隊

「昔の暮らし探検隊」は昭和30年代前後の生活の様子を親子で体験し、現在の私たちの生活を見つめ直すことを目的に、平成19年度から実施しています。今までに、たらいや洗濯板を使用した洗濯体験、七輪を使った炊事体験、石臼を使った粉作り体験と和菓子の製作、昔の遊びをテーマとした竹トンボ作りなどを行いました。

今年度は「お手玉で遊ぼう」「樽前まんじゅう作り」「凧揚げで遊ぼう」を行いました。昭和30年頃の生活や歴史的背景などを、博物館所蔵の実物資料を見せながら学芸員が解説し、体験してもらいました。参加者からは「先人の知恵が詰まった道具を使って体験したことは新鮮な驚きだった」「昔の知恵や技術の伝達の重要性を知り、歴史への理解が深まった」など、現在の便利で豊かな生活が、先人たちの知恵と工夫の積み重ねで成り立っていることを実感していました。

（樽前まんじゅう作り）

昭和30年頃まで苫小牧の名産品として販売されていた「樽前まんじゅう」を製作し、菓子文化を学びました。最初に街とともに歩んできた老舗菓子店の歴史や博物館に所蔵されている菓子作りの道具を紹介しました。菓子の名称には地域を代表する自然や街の歴史を題材とするものが多いこと、菓子作りの道具は職人たちの工夫によって機能的に作られているという解説に、参加者は納得の表情を見せていました。

製作に当たっては、当時使われていた道具も一部使用しました。参加者からは「職人の道具を見て菓子作りの奥深さを知ることができた」「楽しくて美味しい体験だった」などの感想が寄せられました。当時を模した包装紙にまんじゅうを包み、甘さにこめられたふるさとの文化の味を家庭に持ち帰りました。

土曜体験教室

「土曜体験教室」は、苫小牧の歴史や自然について、体験やモノづくりを通して学ぶための行事です。今年度は「うちわづくり」「土偶作り」「草木染めに挑戦」「火おこしに挑戦」などを行いました。

普段当たり前に使っている道具にも歴史があり、今も工夫が重ねられて変化していることや、見慣れている現象にも実は秘密があるなど、身の回りの事物に興味を持つきっかけとなるように、モノを作ったり体験をしたりしながら楽しく学習しました。参加した多くの子供たちは目を輝かせながら、学芸員の話を熱心に聞き、同伴した保護者からも子供と一緒に勉強ができて楽しいなど大変好評でした。

（草木染めに挑戦）

苫小牧で身近に見られるオオアワダチソウとヨモギを使って、布を染める体験をしました。さらし布を染めながら、色が染まる仕組みや、タンニンなどの色の素となる物質について解説し、参加した大人からは「染色や植物のしくみがよくわかった」「身近な植物に、目を向けていきたい」という声がありました。また、子供たちは植物を煮る臭いに「くさい！」と言っていましたが「庭の花でも染まるかな?」「たまねぎの皮を使って家でもやってみたい」と少々興奮した様子で染め上がった手ぬぐいを見せてくれました。

夏休みお助け学芸員

夏休みの自由研究に取り組む子供たちに、博物館や学芸員を活用してもらうことを目的に、「夏休みお助け学芸員」と題して自由研究の相談会と展示解説会を行いました。

保護者や友だちと一緒に、多くの子供たちが訪れ、調べ方やまとめ方など、さまざまな相談が寄せられました。初めての自由研究でテーマが決まっていない子供には、常設展示を見てもらい、相談室と併せてテーマ探しのお手伝いしました。

生き物や化石に関する質問が多くあり、昆虫や植物など、身近で疑問に思ったことをテーマにしている子供が多く見受けられました。図書館や科学センターとも協力し、本を紹介したり、自由研究のすすめ方をアドバイスしました。

無料観覧日行事

5月5日のこどもの日と１１月３日の文化の日は博物館の無料観覧日です。博物館では、展示について楽しみながらで学習してもらうことを目的に、小中学生向けの行事を行いました。

（博物館からの挑戦状）

5月5日は「博物館からの挑戦状」と題したクイズ大会を行いました。スケートや土器、植物や動物に関するクイズを出題し、全問正解者に記念品をプレゼントしました。展示室にいる「お助け学芸員」がヒントを出し「難しい」「こんなにじっくり展示を見たことない」など、親子や友達、兄弟で挑んでいました。

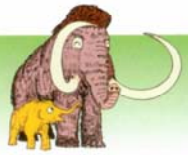
早めに問題を解き終わった子供たちは、学芸員による解説を聞きながら、苫小牧の歴史や自然について学習していました。

企画展も無料で観覧でき、学芸員が展示解説を行うなど、幼児からお年寄りまでたくさんの方が博物館を訪れました。

（見たい！聞きたい！博物館）

１１月３日は「館内で体験しながら学習する」をテーマに時間ごとに内容が変わるブースを設け、苫小牧市博物館友の会・苫小牧郷土文化研究会・苫小牧縄文会の協力で、いつ来ても楽しむことができる行事を行いました。「全部体験したい」「いつもやってほしい」など訪れた子供たちは満足している様子でした。自分で作った作品は持ち帰れるので、中には同伴した保護者に手伝ってもらいながら、作品を完成させた子供もいました。

解説パネルを熱心に読んでいる子供もおり、「博物館は楽しい」「今度は友達と来ていいですか？」など、うれしい声も聞くことができました。



友の会　通　信

今年度も新会員を含めた会員が集い、さまざまな活動を行いました。総会では会の運営についての意見が交わされ、大変有意義な議論を行いました。そのためか、行事の際には「こうしたらもっとよくなる」「来年度はこうしたい」など、会員一人一人が積極的に行事を盛り上げている姿が見られました。

「芸術探訪」や「木組みの技」などでは例年よりも多くの会員が参加し、「友の会祭り」や「ミニ発表会」を行い、博物館の行事に協力しました。また、博物館の特別展で開催した会員限定の解説会には多くの参加があり、中には友人を連れて再び見学に訪ずれた会員もいました。

友の会では、来年度も博物館と協力して、会員がより博物館に親しめるような行事を考えておりますので、多くの参加をお待ちしております。

（シダレザクラについて）

平成20年5月に苫小牧市博物館友の会創立20周年を記念して、シダレザクラの苗木3本を、市民文化公園内の博物館前に植樹しました。その後、そのうちの１本が根付きが悪く、日照不足で葉が枯れそうになったため、無事に花が咲くかとても心配しました。しかし、友の会理事の金田正弘樹木医が、土を換えるなどの適切な処置を行ったため、翌年春には美しい八重の花をつけ、文化公園に訪れた市民の心を和ませました。

今の季節は芽を硬く結んでいますが、春になればまた淡いピンク色の美しい花を咲かせてくれると思います。シダレザクラが見られるのは、文化公園内ではこの場所だけなので、博物館にお越しの際は是非ご覧ください。

平成22年度の行事予定

企画展・特別展

企画展　「アンドレ・ブラジリエ展」　４月２４日～６月６日

特別展　王子製紙苫小牧工場操業100年・苫小牧市博物館開館25周年記念
「紙をつくる　紙でつくる（仮）」８月7日～９月26日

企画展　「苫小牧市博物館の収蔵品展（仮）」２月～３月

観察会・見学会・体験教室

芸術探訪（7/17）　樽前山タイムトラベル（７月下旬）　自然観察会（10月上旬）

昔の暮らし探検隊…　「手作りバターに挑戦」「輪ゴム鉄砲であそぼう」「火おこしに挑戦」
「パン焼き器で昭和のパンづくり」

土曜体験教室……　「草花の標本をつくろう」「絵手紙をえがこう」「やさいで紙をつくろう」
「縄文時代の土鈴づくり」「松かさのツリーづくり」「黒曜石のナイフで切ってみよう」
「たわしで干支をつくろう」「海水から塩をつくってみよう」

苫小牧市
博物館だより

平成22年3月31日発行・第59号
編集・発行：苫小牧市博物館　〒053-0011　苫小牧市末広町3丁目9番7号
Tel：(0144)35-2550～2552　Fax：(0144)34-0408
URL: http://www.city.tomakomai.hokkaido.jp/hakubutukan/